

言葉が紡ぐ、私たちの「お日柄」

学校教育課課長補佐 宮田 雅仁



「本日はお日柄もよく——」

この言葉を耳にすると、多くの人は結婚式や式典などの格式高い席を思い浮かべるのではないのでしょうか。晴れ渡る空の下、新しい門出を祝うための定番の決まり文句。

しかし、原田マハさんの名作小説、そしてそれを鮮やかに描いたドラマ『本日は、お日柄もよく』に触れたとき、この挨拶は、まったく異なる輝きと深みをもって私の心に迫ってきました。

物語の主人公は、失恋と退屈な日常のどん底にいた結婚披露宴で、伝説のスピーチライターの言葉に出会います。そのスピーチは、ありきたりな祝辞などではなく、新郎新婦の人生に寄り添い、会場にいるすべての人の心を震わせ、明日を生きる勇気を与えるものでした。

「言葉」一つで、世界の色がガラリと変わる——。そんな衝撃を受けた主人公が、言葉のプロフェッショナルとしての道を歩み出す姿は、私たちに言葉のもつ無限の可能性を教えてくださいます。

作中で語られる「言葉はワイルドフラワー(野生の花)のようなもの。扱い方を間違えれば人を傷つける凶器にもなるけれど、上手に使えば人の心を温める最高の薬になる」というメッセージは、今も私の胸に深く刻まれています。

私たちが日々、何気なく交わしている会話や、この「たより」に載せる文章。それらはすべて、誰かの心に蒔かれる種のようなものです。現代は情報が溢れかえり、時にトゲのある言葉が刃となって人を傷つけることも少なくありません。だからこそ、私たちは言葉に対して誠実でありたいと思うのです。誰かを想い、丁寧に、心を込めて紡がれた言葉は、たとえ小さくても、傷ついた心にそっと寄り添い、凍りついた空気を溶かす力をもっています。

この「たより」もまた、手にとってくださる皆さまにとっての「心地よい風」でありたいと願っています。忙しい日々の中でふとページを開いたとき、そこに書かれた言葉が日常に小さな彩りを添えたり、温かな気づきをもたらしたりすることができたなら、これ以上の喜びはありません。特別な祝祭の日でなくても、私たちが言葉を通じて心を通わせ、温め合うことができたなら、その日はいつでも、最高に素晴らしい「お日柄」になるはずです。

皆さまの毎日が、たくさんの温かい言葉と笑顔で満たされますように。心を込めて、この一筆を贈ります。

本日もまた、お日柄もよく。

「誰かを想い、丁寧に、心を込めて紡がれた言葉は、たとえ小さくても、傷ついた心にそっと寄り添い……」



Education Center Bulletin

2026.6.25

見附市教育センターだより

6月

「応援される先生」になるために

先月の運動会、グラウンドを囲む多くの視線は、我が子や我が孫だけではなく、先生方の振る舞いにも向けられていました。指導する姿、裏方として動く姿、はつらつと声を張る姿。その一つひとつが、地域の中に「この学校」「この先生」の印象を刻んでいきます。

私たちはこれを「家庭・地域との連携」という言葉で片付けがちですが、実態はもっと素朴だと思います。人は、好きな人のためなら一肌脱ぎたくなるものです。であれば、最も効果的な連携とは、まず学校や先生を「好きになっていただくこと」に尽きます。



好きになってもらえたら、必要以上に身構える必要はありません。一人で何でも抱え込む先生より、困ったときに「助けてください」と素直に頼れる先生のほうが、保護者にとっても安心できる存在です。「任せ、任される関係」は、適度に頼ることから育っていくものです。

あの日のグラウンドにいた多くの人たちは、こどもたちの、そして同時に学校の「応援団」でした。「見られている」というプレッシャーをもし感じた先生がいたとしても、それを「応援されている」という安心感に捉え直すだけで、日々の仕事の手触りは少し変わってくるはずです。

今後も続く学習参観や個別懇談でも同様です。多くの保護者の中には、一時間単位で年休が取れない方もいるはずです。そんな中、大切な仕事を休んで来校されます。また、幼い下の子を、頭を下げて誰かにお願いしてくる方もいるかもしれません。そうした多大なコストを払って来られているからこそ、「来てよかった」と感じていただく工夫が欠かせません。参観で得る「わが子の生の姿」という直接情報は、極めて強い安心感を与えます。そこに加えて、担任との「ほっとする一言の接触」があれば、信頼はさらに深まります。

しかし、ただ「好かれよう」とするだけでは十分ではありません。それ以上に大切なのは、まず教師の側が、こどもを、地域を、仕事を、(そして自分の家族を)能動的に「愛する」ことです。そのひたむきな姿勢にこそ、人は心を動かされます。どうぞ皆さん、クラスの保護者から「先生の応援団」になっていただきましょう。

あなたにとって、「自分が応援したくなる人」とは、一体どんな人ですか？

教科書を開いて知る「小中のつながり」 —— 教育センターの常設書棚をご活用ください ——



去る5月22日、見附中学校を会場に「教科教育専門官授業力向上事業」が開催されました。比護智洋先生による素晴らしい授業(3年・平方根)の後に行われた研修では、参会した小中学校の教員が互いの教科書を手に語り合う、印象的な場面がありました。

「この問題は、すでに小学校でも扱っているのか」

ページをめくりながら驚きの声を上げる先生方の姿からは、校種を越えた接続の重要性が改めて浮かび上がります。

こうした小中学校の主要教科書は、教育センターの書棚に常設されており、いつでも貸出が可能です。授業づくりのヒントを探しに、ぜひお気軽に足を運んでみてください。

自分を変える「決断」と、その先にある一歩

新年度のスタートから三ヶ月が経とうとしています。運動会や定期テストなどの行事を経て、学年の土台や輪郭が見えてきたことと拝察します。その一方で、日々の指導や子どもへの対応を通し「本当にこれでいいのだろうか」と、ふと立ち止まり、悩みを深めている先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。

私たちの仕事に、あらかじめ用意された正解はほとんどないのかもしれませんが。ある子にとっては最善だった対応が、別の子には通用しないこともある。そんな現実の前で、時に自己肯定感が揺らぐ日があるのも、教師という仕事のリアルな姿です。

しかし、私たちはそこでただ迷い続けているわけにはいきませんよね。刻一刻と変化する目の前のこどもの事実を前に、「今はこれが最善だ」と腹を括り、静かに一歩を踏み出す。ちょっと大げさな言い方かもしれませんが、その「覚悟の連続」こそが、停滞した空気を破り、教育を前に進める原動力なのだと思います。

以前、私は、初任者に向けてこんな話をしました。

「自分に合う Consent (環境) を世の中に探し続ける生き方もある。しかし、自分が目の前の Consent の形に合うように自らを少し変えていくことが、人生を切り拓く第一歩ではないか」と。

教師が「自分を変える」というのは、過去の自分を否定することでも、流行りの教育論に形だけ合わせることでありません。これまでのやり方ではこの子の心に届かないと見極めたとき、自らの見方やアプローチを柔軟に変えていく。それは、自分の実践に対する極めて能動的な「決断」です。

過日、三十年前に教育実習生だった元学生から、思いがけないメールをいただきました。

「実習という僅かな期間でしたが、今でも先生の『教師は常に自分を変えていかなければならない仕事』という言葉が深く印象に残り、私の教師としての在り方に影響を与えてくださいました」

混雑する廊下で私を見つけ、声をかけてくれた彼女は、今、教員養成の学校で立派に教鞭をとっていました。三十年前の私の言葉が、一人の若者の人生を少しでも支え、今また次の世代の教師を育てる糧になっていたのかもしれない。その事実、私自身が激しく揺さぶられ、大きな勇気をもらいました。

「自分はよい教師になれたのだろうか」という本当の答え合わせは、学校を去る瞬間でさえ分かりません。私たちが蒔いた種の答えは、十年後、二十年後に、大人になった子どもたちの生き方の中に、ひっそりと現れるものだからです。

だから、私たちは今、この瞬間の「最善」を尽くすしかないのですね。

自分が変化していくとき、脳内にはある種の高揚感が走ると言います。「なんだか新しい自分に変わってきているぞ!」というその手応えを、少しずつ楽しめるようになること。技術や経験の蓄積だけでなく、そうした変化のプロセスそのものを肯定できるようになることが、「一人前」への確かな歩みなのだと思います。

見附市の教員研修「師がく」が今年もスタートし、若手からベテランまで既に 20 数人の先生方の授業を参観し、個別に授業について語り合いました。その中で分かったことは、ほとんどの先生が自分の課題から目を背けず、目指すところに向けて新しいチャレンジをしているということです。例えば、何度言ってもこの子たちは……などと愚痴るのでなく、かかわり方をこう変えてみたらどうか……と、自分を変えていく小さな試みをしているということです。

梅雨が明ければ、夏はもうすぐそこです。今月もまた、目の前の教室で、静かに自らの一手を更新していきたいものです。 (ま)



理科の授業改善 ～令和7年度全国学力・学習状況調査の結果から見える課題と改善のヒント～

講師：新潟県立教育センター 指導主事 長谷 一弘 氏

前半では調査の概要が説明され、新たに導入されたコンピュータで行う CBT 方式のテストや、異なる問題でも学力を同じ尺度で経年比較できる「IRT スコア」というテスト理論について、詳しい解説がありました。

続いて、調査結果の分析から見てきた課題が共有されました。全体的な傾向として、「知識を活用すること」や「根拠を明確にして表現すること」に課題があることが指摘されました。さらに、教科ごとの詳細な分析も紹介され、例えば国語では「伝えたい事柄とその根拠とを適切に結びつける」こと、理科では「何が反応して何が生成したのか」が整理できるような指導が必要であることなど、具体的な指導改善のポイントが示されました。

本講演は、学力調査の詳細なデータ分析に基づき、日々の授業においてどのように児童生徒の課題を克服していくかについて、多くの実践的なヒントが得られる大変有意義な時間となりました。今後の授業づくりの大きな参考となる内容でした。

授業改善の
全体的な
3つの視点

既習知識を活用する場面を設けること

考えを共有・比較する活動を取り入れること

複数資料を活用し、根拠をもって説明すること

教科ごとの
具体的な
ポイント

国語：自分の考えが伝わる文章になるように、伝えたい事柄とその根拠を適切に結びつけたり、事実や事柄を具体的に示したりして書くよう指導することが大切です。

数学：不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、その判断の理由を確率などの数学的な表現を用いて説明できるように指導することが重要です。

理科：「何が反応して何が生成したのか」を整理した上で、化学変化を原子や分子のモデルを用いて考察させるなど、視覚的に捉えることが大切だとされています。その際、1人1台端末を使って生徒自身がモデルを動かし、試行錯誤できるような活動を取り入れることが提案されています。

感想

今回の研修会は理科主任会に引き続き、同じ会場で実施されました。各校理科主任を中心に、23名の参加を得ました。多くの方が感想を寄せた内容について紹介します。

授業デザインの工夫と「知識の構造化」に向けて

個別の事実を積み重ねて一般的な概念を見つけるというアプローチが、今後の授業づくりや改善に大変参考になった。中心概念や関連する知識の構造を意識した授業改善に取り組んでいきたい。(小学校・教諭)

知識を結び付ける中心概念を理解する授業デザインについて、グループワークで意見を交わす中で深く考えさせられた。授業改善の視点を常に意識したい。(中学校・教諭)



「根拠をもって説明する力」の育成と記述式の課題へのアプローチ

全国学力・学習状況調査の結果からも、記述式問題や根拠をもって説明する力に課題があることを改めて実感した。授業の中に『書かせる・話させる・説明させる』活動を意識的に取り入れたい。(小学校・教諭)

こどもたちの思考の流れを切らないような声かけや、説明し合う時間の確保、まとめ方の例示などを工夫し、こどもたちが主体的に学べる楽しい授業をつくっていきたい。(小学校・教諭)



IRT(項目応答理論)の理解と客観的な実態把握・評価

IRT理論を理解することで、児童生徒の学びの形成的評価をより正確に行えると感じた。これが日常的に行えるような、実用的な質問紙やツールがあるとさらにありがたい。(中学校・教諭)

IRTを単元の節目などで活用できれば、児童の実態をより適切に見取ることができ、理想的な評価につながるのではないかと期待が膨らんだ。(小学校・教諭)



教員間のネットワークや相談体制への期待

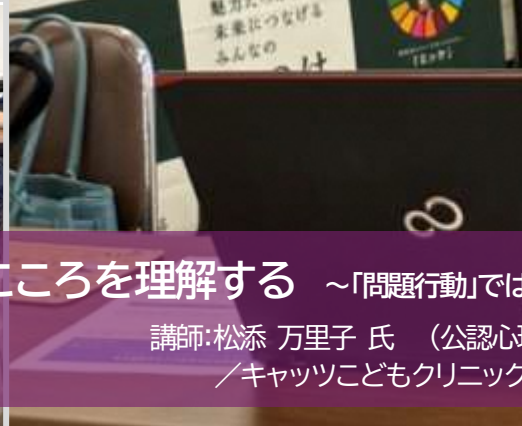
日々の授業での困りごとや教材について、市内の先生方やセンターの先生に気軽に相談できる場があると、横のつながりで一緒に授業を考える良いきっかけが生まれると思う。(中学校・教諭)



成果と今後の展望

参加者は「自分ならどう授業を改善するか」を真剣にメモし、当事者意識をもって考える姿が見られ、現場の課題解決に向けた高い意欲が確認できました。

今後は、特に、端末を効果的に活用しながら、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、児童生徒自身が「知識を構造化」していけるような授業への転換が不可欠です。今回参加された先生方が各学校で実践に取り組み、そこで得られた成功例や改善の工夫といった「生きた知恵」を校内で共有していく。そうした地道な還元の連鎖が、若手教員を含めた学校全体、ひいては市全体の指導力の底上げへと繋がっていくことが期待されます。



不登校のこどものこころを理解する ～「問題行動」ではなく「SOSのサイン」として見る支援へ～

講師: 松添 万里子 氏 (公認心理師・学校心理士
／キャッツこどもクリニックカウンセラー・東京学芸大学特命准教授)

本講演は、急増する不登校の現状を踏まえ、こどもの心身で起きているメカニズムを正しく理解し、学校や家庭で実践できる具体的な支援のあり方を学び、こどもの「こころの安全」を守るアプローチを目指す内容でした。

1. 現状の把握と「認識のギャップ」

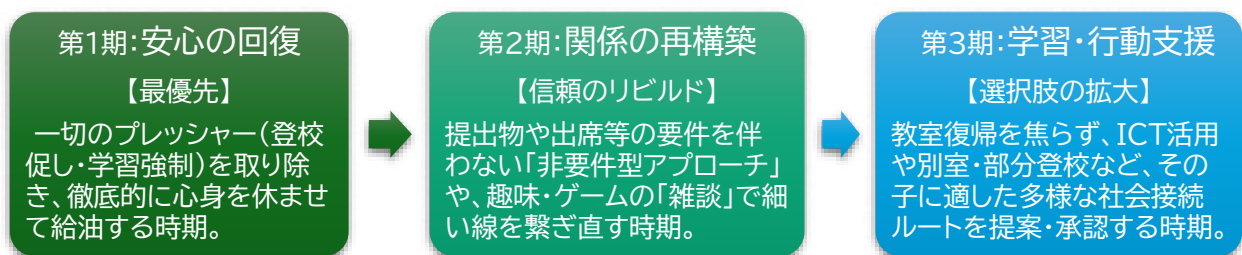
文部科学省の最新調査(令和6年度)では、全国の小中学校の不登校児童生徒数は353,970人(13年連続過去最多)と極めて危機的です。新潟県内でも増加傾向にあり、特に小学校低学年での不登校の低年齢化・深刻化が顕著です。また、学校側が把握する主因トップ「無気力・不安(30.1%)」に対し、こども側の理由は「なんとなく(43.6%)」「身体の不調(42.9%)」が上位です。追跡調査でも、多くの若者が「当時は理由が分からず、詮索されることが最大の恐怖だった」と語っており、大人の「さぼり」という誤解や登校刺激は、こどもの自己肯定感を完全に破壊してしまいます。

2. こどもの内側のメカニズムと「圧力構造」

現代の不登校は意志の弱さではなく、過剰に適応しようとする真面目な子がすり減った結果です。特にSNSによる「24時間続く人間関係(同調圧力)」への「デジタル疲弊」が心理的安全性を削っています。突然動けなくなる状態は努力不足ではなく、脳の安全装置が働いた「シャットダウン(フリーズ反応)」です。「心のガソリン」が完全に枯渇(EMPTY 0%)しており、無理に動かせばこころは大破します。一日中寝たりゲームをしたりする時間は怠けではなく、「脳を冷やす超急速充電」であり、何もしないこと自体が高度な治療プロセスなのです。

3. 支援のパラダイムシフトとロードマップ

土台である「安心」をスキップせず、以下の「3層モデル」に沿った段階的な関わりが重要です。



大人の一言は充電にも放電にもなります。「みんな頑張っているよ」等の他者比較ではなく、「よく我慢して頑張ったね(労い)」「何があっても味方だよ(保証)」という安心型の言葉かけが安全基地となります。

4. 保護者への支援と未来への展望

保護者も激しい罪悪感と不安で孤立しています。教員は指導者ではなく「共にところを探る同盟相手(伴走者)」として家庭を絶対に責めず、「家でご飯が食べられた」等の小さな事実(回復ステップ)を共に承認することが大切です。文科省の5年後(20歳時点)追跡データでは、不登校経験者の高校等進学率は85.1%、就学・就業率は81.9%に達しています。不登校は人生の終わりではなく、未来の選択肢を再構築するための重要な充電期間です。「学校に来させること」だけをゴールとせず、「その子のところを守り抜き、社会との温かい繋がりを維持すること」を共通目標にしていきましょう。

感想

今回は44名の参加を得ました。寄せられた感想をまとめると、主に以下の4点に集約されます。

「登校・学習」をゴールとしない姿勢への共感

まずはこどもの心を守り、安心感を与えることが最優先。

これまでのアプローチに対する深い内省

「なぜ来られないのか」と理由を詮索してしまっていたことや、「エネルギーが切れているのに無理にエンジンをかけよう(登校刺激をしよう)」としていた」など、良かれと思って行っていた関わりへの反省。

「ガソリンの例え」や「3層モデル」の分かりやすさ

不登校を「心のガソリン切れ」と例えた説明や、段階的な支援を示す「3層モデル」が非常に明快。今の児童生徒がどの段階にいるのかを見極める具体的な指針に。

「雑談」の価値の再発見と、明日への勇気

日頃の「たわいもない雑談」が安心感を生む大切なアプローチだった。「自分の関わりは間違っていなかった」と救われたり、明日からの実践への勇気をもらったりした。



中学校教員

- ・5年後の追跡調査から、当時言語化できなかったこどもの葛藤に気づかされ、理由を詮索していた自分を深く見直した。
- ・高校進学を前に焦る時期だが、学校も家庭も「待つことが重要」と理解しステップを踏む大切さを感じた。



小学校教員

- ・「車のガソリン」の例えが非常に分かりやすく、登校刺激の時期を正しく見極めようと思った。
- ・今受け持っている子が「3層モデル」のどの段階にいるのかを他の職員や専門家、保護者と確認しながら対応したい。
- ・学校が全てではないという割り切りを大人が持つべきと感じた。



保育園関係者・保育士

- ・小学校で不登校になった卒園児が園に弟の送迎に来た際、保育士と好きなアイドル等の「雑談」をしていた。あの時間の大切さを今分かった。
- ・自分自身も不登校経験があるが、両親が好きなことをさせてくれ、保育士への道を進むときも何も言わず進学させてくれたから今がある。こどもにとっての安心の場になりたい。



成果と今後の展望

「登校」をゴールとせず、子の「安心感」を最優先にする初期対応と保護者への伴走支援を見附市内で定着させましょう。そして、「待つ」対応への共通理解の構築と、低年齢化する「行き渋り」に対する早期連携体制の具体化を目指しましょう。

6月 科学教育部



6/11(木) 島切窪のアジサイ

【ここまでの研修の様子】

参加者が多く、活発な研修会になり、感謝しています。

【単元別研修会】魚類(メダカ)の探究

講師として加茂市立須田中学校の澤栗 隆之先生をお迎えし、メダカを活用した実習の具体例や、飼育管理における留意点等についてご教示いただきました。参加者からは、「中学校でも、本日頂いたメダカやミジンコ、ゾウリムシを授業で活用したいと思いました。」や、「これでメダカの授業の準備ができました。」といった感想が寄せられました。



【野外研修会】植物観察会 in 見附中学校・見附小学校

放課後の時間に見附小学校・見附中学校の校庭にて植物観察会を実施しました。講師に上越教育大学の五百川 裕教授をお迎えし、それぞれの校庭で見られる樹木や春の草花について、実物を観察しながらご解説いただきました。身近な校庭にも多様な植物が見られることや、学校の教育活動に活用できるヒントについて教えていただき、大変有意義な研修となりました。

参加者からは、「これまで何気なく過ごしていたグラウンドや前庭に多様な植物があることを知り、新たな視点で見ることができました。また、こどもたちが日頃遊んでいる場所に化石ともいわれるような樹木があることを知れば、こどもたちの世界もさらに広がるのではないかと感じました。」という感想が寄せられました。



ドイツツウヒの雌花を観察する参加者

【単元別研修会】チョウの探究

小・中学校におけるチョウの活用の仕方の違いを確認した後、参加者は、実習に取り組みました。チョウや昆虫に関する基礎知識を学んだ後、アリのレジン標本作製しました。チョウの乾燥標本作製グッズをお土産に持ち帰る参加者もいました。



【 7 月 の 研 修 案 内 】

1	単元別研修会 「科学研究の進め方」	7月2日(木) 15:40~16:40	科学研究の進め方に関する実習を行います。実際に研究計画を立てて、グループ協議をします。「科学研究の進め方の資料」をお持ち帰りいただけます。
2	「野外研修会」 (アリに関する実習)	7月31日(金) 9:30~11:30 (雨天の場合は中止) 集合:市民の森の駐車場	身近な昆虫である「アリ」の採集の仕方、種同定の視点、標本の作り方に関する実習を行います。

※8月27日(木)・28日(金)に予定していましたが「単元別研修会【実験計画の立案】」は両日とも参加の希望がなかったため、今年度はこの研修会を実施しません。

※以下の5つの単元別研修会は2日間開催する予定でしたが、片方の日にちに参加者を集約できたため、2日間ではなく、以下の日にちのみ開催いたします。柔軟に対応していただいた参加希望の皆様、ご協力ありがとうございました。

【1日のみ開催する単元別研修会】

- ① 7月 2日(木) 単元別研修会「科学研究の進め方」 (※7月3日(金)は開催しません。)
- ② 10月 9日(金) 単元別研修会「磁界の探究」 (※10月8日(木)は開催しません。)
- ③ 10月23日(金) 単元別研修会「秋のおもちゃづくり」 (※10月22日(木)は開催しません。)
- ④ 11月27日(金) 単元別研修会「溶解の探究」 (※11月26日(木)は開催しません。)
- ⑤ 1月29日(金) 単元別研修会「燃焼の探究」 (※1月28日(木)は開催しません。)

※研修会の申込については終了していますが、開催予定の研修会に、新たに参加を希望する方は、見附市教育センター科学教育部まで電話またはメールでお申し込みください。歓迎いたします。

科学の公園



教材として使う植物の手間抜き栽培法

6月の研修会で参加者にキャベツの苗を配付しましたが、そのキャベツの苗は手間抜き栽培法で育てたので、ご紹介します。

Tea Room 内のコミュニティ「理セン 授業・教材アイデア集」にアップロードされている三市北蒲理セン作成の資料「袋栽培のジャガイモを利用したでんぷんの抽出実験」を参考に、キャベツの苗を100円ショップの2Lの野菜の土に入れて、1カ月間、毎日2回(朝と昼)水をあげたところ、右下の写真のようになりました。実や種子の収穫が必要なく、葉や茎を教材として活用する場合は、これで十分です。また、買い物かごに入れているため、日当たりのよい場所や理科室内への移動も楽で、扱いやすいです。ぜひお試しください。

全13株



1か月後、カゴに入りきらなくなり、容器を1つ増やしました。

